

## 台湾原住民族に関する情報遺産の記録化

著者	野林 厚志
雑誌名	国立民族学博物館調査報告
巻	137
ページ	89-94
発行年	2016-09-20
URL	<a href="http://doi.org/10.15021/00006104">http://doi.org/10.15021/00006104</a>

## 台湾原住民族に関する情報遺産の記録化

野林 厚志  
国立民族学博物館

### 1 目的

本発表の目的は、台湾におけるオーストロネシア系先住民族である台湾原住民族の人々が、台湾の内外の博物館に収蔵されてきた民族資料をてがかりに彼ら自身の歴史や文化を探究するとともに、そこで得た知識や知見、経験を生かしながら、自分たち自身の文化の創造を行っている過程について紹介することである。

本発表では、彼らの営みを考える一つの作業概念として、情報遺産という枠組を設定しておきたい。情報遺産とは、自然遺産や文化遺産、記憶遺産といった、景観や特定の芸能、歴史的な出来事を想起させる事物のように、継承されていく対象やその範囲が明確にさだまったものであるとはかぎらない。「誰、いつ、どこ、何、なぜ、どのように」という事象の集合体であり、それは、有形、無形に関わらず「〇〇」遺産とよばれるもののすべてに共伴していく人間の行為とその記述である。これらをどのように整理し、継承していくかが、情報遺産を構築していくうえでもっとも重要な要件となる。本発表では、情報遺産という作業概念を発表者が想起するにいたった経緯を、台湾と台湾原住民族をとりまく歴史的、社会的脈絡に沿いながら述べていきたい。

### 2 台湾の民主化と台湾原住民族

台湾原住民族とは、台湾の多数派をしめる漢族系住人に対して台湾に先住してきたと考えられているオーストロネシア系の先住民族である。彼らは現在、台湾の総人口の2%弱の45万人の人口を擁する。2015年2月の時点で14の民族集団が台湾の中央政府により公的に認定されている。中国の歴代王朝からは、文化の及ばない地に住むという「化外の民」としてみなされ、日本統治時代や第二次世界大戦後の台湾においても、社会的、経済的に劣位にあった。

台湾における民主化が進む1980年代以降、原住民族側から、自らの文化の尊重と土地権を含めた様々な権利回復の主張が強くなり、80年代後半には「原住民族運動」とよばれる社会運動が展開した。その結果、原住民族の文化や福利を国が保障、振興することを約束した憲法改正がなされ、彼らの呼称も「原住民族」という、漢語の表意で「もともと住んでいる人々」という正式名称が採用されるにいたった。行政組織についても、原

住民族自身が配置された「原住民族委員会」という省庁が発足し、原住民族行政が推進されていくことになった。

これらの一連の社会的な動きのなかで、達成されなかったことの最大のことがらは彼らの土地権の回復であった。彼らの大半が居住してきた山岳地域は日本統治時代に山地保留区として、個人の所有が禁じられ、原住民族の人々はそこで居住したり、生業を行うことは認められてきたが、売買も含めた不動産としての財産権は不完全なものであった。このことは、中華民国政府施政下でも継続している。一方で、政府側の支援が比較的手厚くなされてきたのが伝統文化の振興や教育、福利厚生に関わることがらである。教育では母語教育の振興を目的とした検定制度が導入されたり、「部落学校」という郷土教育の実践が奨励された。また、文化産業の起業や各種のイベントに関する予算的な措置も行われるなど、原住民族であるという理由で公的な資金援助を受ける機会には恵まれていった。

こうした背景も手伝い、原住民族の集落には、彼らの伝統的な衣服や道具をつくる工房が開かれたり、自然志向をつよめる消費者にむけた有機農作物の生産団体などが設立されたりしていった。そこでは伝統的な衣服や道具が作られるとともに、制作者側の意思で、彼ら自身の創意工夫が重ねられた工芸品や衣類の生産がおこなわれるようになっていく。

### 3 「重現泰雅」の試み

従前に述べてきた工芸生産の試みのなかで、発表者が注目してきたのが、タイヤルの女性工芸作家である尤瑪達陸が進めてきた「タイヤル族伝統服飾と関連資料重製収蔵計画（泰雅族伝統服飾及相關器物重製収蔵計画）」である。これは、原住民族でもの作りにたずさわっている人々が博物館の資料を観察しながら、現在の工芸と博物館資料とを有機的に連結させ、そこから新たな創作を生み出そうという試みである。

尤瑪は1963年台湾北部の苗栗県に生まれた。父親は大陸の湖南省出身であり、母親はタイヤル族の女性である。大学卒業後、台中の公的機関に公務員として勤務し、主として原住民族の衣服の収集や購入といった仕事にたずさわっていた。1990年代の初頭には自らも機織りをはじめ、タイヤル族の伝統的な服飾文化を自らも伝えていくことを実践しはじめた。

尤瑪が機織りをはじめたきっかけは、集落の中で伝統文化の再興と継承に関する活動をはじめようということになったときに、関係者から彼女は女性だから機織りを担当すればよいと決められたことによる。タイヤルにとって機織りは基本的に女性の仕事であり、その技術の習得が成人女性の資格となるとされてきた。男性が機織りをしたり、織機にふれることはタイヤルの社会のなかでは基本的にタブーとされてきた。

尤瑪が集落の人たちと原住民族文化の地域からの再興をめざした時期は、原住民運動のもとで権利の主張が盛んになり、その到達点としての原住民(族)の呼称が認められた憲法改正が行われた1994年前後に相当する。尤瑪たちタイヤル族のみならず、同様な動きは原住民族の各集団、各集落で見られた。これは、貨幣経済が浸透し、消費生活が一般の台湾住民と変わらないようになっていく過程において、それまでの伝統的な衣類や道具が使われなくなり、骨董品や趣味の蒐集品として売却されていき、自分たち自身でも衣服や道具を作らなくなった状況において生じたアイデンティティの危機への応答であったと考えてよいであろう。自分たちが原住民族であるということを対外的にしめすと同時に、自覚していくための手段でもあったと言える。

尤瑪らが集落のなかで伝統文化の再興に着手しはじめたときにぶつかった最初の大きな課題が「伝統はどこにあるのか」ということであった。1995年に発足したばかりの原住民委員会(当時)は、各民族集団の歴史調査や伝統文化の調査に着手し、尤瑪たちもまたタイヤル族の系譜や伝統衣服の調査を行った。そのときに実感したのが、衣服に関する資料が少なく、さらに聞き取りだけでは技術は十分には理解できないということであった。

そこで、とりいれたのが古写真に関する聞き取りである。写真は撮影された年月日や撮影されたときの状況に関する情報がなければ、その価値は激減すると思われるがちである。しかしながら、尤瑪たちが古写真をたずさえて集落の古老をたずねたときの反応はその考え方を必ずしも支持しないものだったという。例えば、次のような言葉を耳にしている。

「このような衣服はもう見なくなったが、これは私たちの服で、私たちと同じような服を着ている人たちはこの溪流沿いに住んでいて、この溪流を1本越えると、ちがった服になるのです」(2012年、尤瑪達陸私信)

タイヤル族の居住様式は溪流沿いに小家族が点在することが、日本統治時代の人類学や民族学の調査から知られてきており、古写真から得られた古老の言説はその学術的知見を確証するだけでなく、物質文化上でも同様な現象が見られることを示唆する内容となっていた。

古写真について、その内容についての知識や経験のある人間、その時代を生きた人間が見ることによって得られる情報は、古写真に新たな価値をもたらすことは明らかである。同時に、古写真の内容を経験的に理解できた人間がいた時代も情報として非常に重要である。写真について得られた情報の正確性を検証するためのいわゆる資料批判の材料として、検証者の時代経験も確認されるべきだからである。

ところで、こうした写真資料も実は工芸制作のためには限界があることを尤瑪たちは指摘している。それは、写真は二次元の資料にすぎず、三次元であるものを制作するう

えて必要な情報を十分に得ることはできないという理由による。そこで、尤瑪たちは内外にある博物館の台湾原住民族の資料の熟覧調査をはじめた。尤瑪たちの制作活動の追い風になったのが、その時期に開館した国立台湾史前文化博物館（以下、史前館）である。

史前館は、1992年に開館した台湾でも新しい国立博物館であり、収集する資料はいわゆる歴史的な古物ばかりは期待できないという事情があった。そこで、彼らが考えたのは原住民族の文化の未来に目を向けようということであった。すなわち、現在の時点で得ることのできる原住民族の知識や技術をそれぞれの土地に赴いて記録するとともに、国内外の博物館に収蔵されている過去に製作された資料を調査することによって、伝統的な技術の復元とその継承を行うという意図があった。「泰雅族伝統服飾及相關器物重製収蔵計画」はこうした博物館側の事情と、尤瑪が目指していた自民族の伝統的な服飾技術の継承への思いとが会って開始されたという経緯があった（林2008: 7-12）。

彼らが複製ではなく重製という言葉を用いていることには留意しておかなければならない。複製とは文字通りコピーである。彼らが定義した重製は、ものの製作において新たな技術や素材を使用することを厭わないという態度であり、製作されるものは新たな創造であると認識されていた。これについては様々な議論があったとされているが、この計画の目的は、ものを作る過程を知ることにより、祖先が新たな知識を獲得した過程に接近し、過去と現在とをつむぎあわせるということであり、重製を積極的に受容するという共通の理解があった。興味深いのは、重製という考え方が生まれた背景には、民族資料の複製が倫理的に許容されるか否かという議論が存在していたことである（方2008: 13-24）。現在の著作権制度にしたがった場合、作品でないものの複製は可能ではあるだろうが、ある特定の民族に固有なものを、外部者が複製することが適切か否かという問題はとりわけ民族資料が、当事者である民族集団の知的財産であるということに鑑みた場合には倫理的に慎重になる必要がある。すなわち、博物館や研究者が実物の資料ではなく、民族資料の複製品を製作し、それらを展示することの倫理性や真正性が問われていたと言える。

## 4 情報遺産のもつ意味

尤瑪たちは従前に述べた史前館のプロジェクトで民博の資料の概要調査を2007年に行った後、2012年には筆者の研究プロジェクトで民博の収蔵資料の熟覧調査を行った。基本的な形態計測、色彩の調査、全体および細部の写真撮影などを通して、日本統治時代に製作された衣服の特徴や変化に関する基本的なデータを取得することができた。尤瑪たちはこれらの経験をもとに、新たな衣服の制作を試み、それらの一部は2014年3月に完成する民博のリニューアルされた常設展示で展示されることになっている。

筆者はこれらの時代に書かれた民族誌の情報を収集し、尤瑪たちが衣服の資料から把



握した情報と当時の民族誌的な脈絡とをつき合わせるような議論を重ねていった。

情報遺産という観点で尤瑪たちとの協働作業を考えたとき、それは、我々が行った調査によって得られた情報だけでなく、その情報を引き出すために行った調査や研究の過程もまた情報として重要であるということが理解できる。それは、尤瑪たちが制作した新たなタイヤルの衣服に関わる情報となるからである。すなわち、尤瑪たちが制作した衣服が後々に調査、研究の対象とされたときに、尤瑪たちが民博に収蔵されている資料の調査を行ったうえで制作した衣服であるということはそれらの衣服を理解するうえで少なからず重要な情報となるからである。換言すれば、研究者やものの作り手も民族の知識や経験をつくり、それを継承させていく役割を担っており、その過程そのものが情報として伝えられていくことによって、より正確な事物の把握が可能となることが期待されるのである。

こうした正確な情報の把握と継承は実は原住民族社会だけでなく、台湾全体にとって重要な課題となっている。

台湾は中国王朝や日本の支配下にあった時代が長く、台湾自体の歴史的記録が台湾自体には十分には残されていない。歴史史料や地図の類は海外の博物館や図書館に収蔵されていることも少なくない。民主化の進んだ台湾において、いわゆる中国正史ではなく台湾史を探究しようという風潮が強まったときに、足かせとなったのが国内における資料の少なさであった。自国のことが書かれた図書や地図であるのにも関わらず、海外にしか関係した資料が無いというもどかしさを台湾の人たちは幾度となく感じてきた。そこで、台湾がとった方策が海外の諸資料の複製である。正確な複製品を作成し、そこにある情報を取得し、それを台湾のなかで継承させていく方向性や手法が定着してきたことは間違いない。

原住民族に関する民族資料に関しても同様なことが言える。それらを返還や返却というかたちで台湾にもどしてしまうのではなく、自らがそれらの調査を行うためにおもむき、むしろ、それらを収蔵している博物館や機関との関係性を継続させて、調査や研究を重ねることによって継承させていく情報を増やしている戦略をとっていると言ってよい。尤瑪たちとの協働の作業のなかで繰り返されたのは、「自分たちはものを返却してもらうことには関心がなくなってきた。それは、過去の人たちが作ったものであり、自分たち自身のものではない。そこから学びえたものを使って自分たちが新たなものを創りだすことに意味があり、それを記録していくことに意味がある。」(2012年民博での調査時の尤瑪達陸の発言)ということであった。調査や研究は一度で完了するものではなく、一度の調査で新たな課題が見つかり、また調査や研究をくりかえしていくことにより、継続的で発展的な情報の増殖が期待できることは言うまでもない。尤瑪たちとの協働作業はそのことを筆者に教えてくれたといってもよい。

## 5 むすび

尤瑪たちが行っている工芸生産は、経済活動であるとともに民族の文化や伝統を後々に伝えていくことが重要な目的とされている。同時に今を生きる人たちの文化的営為そのものも伝えることが必要とされてきた。そして、その方向が垂直方向と水平方向、すなわち時間と空間のひろがりをもつことによって、その存在を誰もが認識するという役割をはたしてきたのである。

集落や民族集団の内部だけで継承される文化や歴史というものが存在することは否定しない。一方で、外部から拒絶された状況で存在できる社会はもはや現実的にはありえないだろう。とりわけ、外来者との複雑な関係をたもちながら生き抜いてきた台湾の人々には他者との関係性をうまく自分の利に転換させていくという巧みさがあると筆者は感じている。自分たちの歴史や文化、技術の記述を他者にもわかるようなかたちにしたうえで、それらの継承と新たな情報の創出にイニシアティブをとって進めるという具体的な実践を原住民族の人たちが行ってきたからだ。換言すれば、伝統の知覚化を実践してきたのである。

おそらく、今後もこうした原住民族の人々と博物館との協働は継続するであろう。民博に原住民族の資料が収蔵されているかぎり、民博は原住民族の調査や研究に協力する義務があると同時に彼らの文化や歴史に関わる学術情報の収集や継承を博物館のもつ多様なメディアを通して実現させていくことが必要となるからである。両者が並行して情報遺産を記録しそれを共有させながら協働の営みを継承していくことは、博物館が結節点となり、台湾の原住民族の歴史や文化がグローバルな規模でその存在が認知され続けることにつながる。一方で、博物館側にとって、収蔵庫にある資料が展示場にある資料以上に、研究、調査という熱い照明をあてられることは収蔵資料の存在意義を格段に高めることになる。

情報という遺産を継承していく態度は、原住民族の人々と博物館との互酬的な関係性を保障し、そのための作業を行う、その具体的な方法をともに考えていくという楽しい時間を与えてくれているのである。

## 参考文献

方鈞璋

- 2008 「重現祖先的盛装：記史前館泰雅族伝統服飾及相關器物重製収蔵計画」『重現泰雅』（国立台湾史前文化博物館）pp.13-24.、台東：国立台湾史前文化博物館

林志興

- 2008 「兩條軸線的交会：部落與博物館的合作」『重現泰雅』（国立台湾史前文化博物館）pp.7-12.、台東：国立台湾史前文化博物館